



追悼	—	1~5
I.山行 公益事業等 報告	—	6~10
II.行事等、報告、案内・連絡	—	11
III.今後の予定		11、12

追悼 津田 文夫さんの思い出



令和6年9月24日御逝去された、故 津田 文夫さん(享年86歳)の思い出について親交の深かった石川支部の3名の会員の方から追悼文を寄稿して頂きました。
なお、石川支部報 峯 2024年 第1号 第42号(2024年9月30日発行)に、「津田さんの訃報に接して」との樽矢支部長からの追悼文を掲載していますので併せてご覧ください。

津田さんとの海外遠征の思い出 岡本 明男

昭和43年5月9日から3日間深田久弥氏御一行と当支部の市村銑治・中川博人の両氏が笈ヶ岳登山の後、深田久弥氏を囲んで別所の筍料理店で懇親会が開かれた。その席上、小林支部長からこの度、当会に入会された津田文夫さんですと紹介されたのが津田さんとの初めての出会いであった。

以後「公私」とともに大変お世話になった。

「公」は海外遠征など石川支部での登山活動で「私」は歯の治療である。特に虫歯の多かった私は20代には毎年歯の治療のため津田歯科医院にかよった。

石川支部は昭和35年にヒマラヤ遠征研究会を発足して、チャムラン遠征計画を発表するも資金面で挫折した経緯があった。岩間での懇親会の席上、先輩は多くは語らなかったが度々チャムラン遠征について話題として上っていた。遠征についての熱い思いが彼等の中で脈々と流れていた。深田久弥氏と支部は十数年前から海外登山に対して、常に助言や指導をして戴いていたので懇親会の席上当然その話も出ていた。

昭和43年5月12日海外登山研究会が小林支部長以下15名のメンバーで発足した。遠征条件はキャラバンが1週間程度、登山期間は2ヶ月間、個人負担は30万円位で登れる山であった。この条件に合う山とし

て若手では、アラスカのデナリ(マッキンリー)が上がった。その他、ネパールヒマラヤやヒンズークシユ等の研究が始められていた。

そんな時、昭和44年7月~8月にかけて津田さんが個人でパキスタン北西辺境のディルゴル氷河やアフガンに出かけその報告が秋になされた。津田さんによってティリッチミール(7708m)のディルゴル氷河が紹介された。津田さんが撮った1枚の写真の中に、ディルゴル氷河から南西稜が写った写真にみんなの注目が集まった。南西稜はディルゴル氷河から岩稜の尾根に取り付き上部の岩と氷のミックスした岩稜帯から7000m付近で岸壁となって頂上の尾根に続いている。

バリエーションルートを望んでいた私達にとっては、魅力的な山であり第1目標として取り上げられた。

しかし、ディルゴル氷河からの登頂は、すでにオーストリー隊が2回も失敗している。また、ディルゴル氷河の大アイスホールが突破できるのか？ 私たちは何日もかけて検討を重ねた結果、登山期間は3ヶ月間、個人負担は50万円として、バリエーションルートのディルゴル氷河よりアタックする事に決定した。

遠征隊の医療は、当初申請の段階で金大医学部十全山岳会OB2名の参加が予定されていた。しかし、

諸般の事情により2名とも参加できなくなりその役割を津田さんが担う事になった。

津田さんにとっては、専門外の分野の医療を担当する事はかなりの重圧であったと思われる。しかし、そうはいつでもお医者さんは津田さんしかいないので私達にとっては頼もしい存在であった。

キャラバンの最終キャンプは夏の出作り小屋のあるシャドック(3800m)でテントを張った。ここで私は少し頭痛がしたので風邪かな？と思ったがあの時が私にとっての高山病だったと思うほど軽くてすんだ。

BC(4300m)に着いたとき3名の者が酷い頭痛に悩まされ、頭を抱え込んで寝込んでしまった。

高度障害の影響は、頭痛、食欲不振、倦怠感、下痢等の症状として表れた。その都度、津田ドクターは対応に追われていた。

登山活動が始まると、高度と距離に比例して体調不良者が増えてきた。6月30日C3(5800m)以上でルートワークをしていた私の消耗が激しくて、顔や手足がパンパンに腫れた満月状態になったため、BCに下る途中、診断のため津田さんが荷上を兼ねてC1(4600m)まで迎えに来てくれた。私の症状は過労と高度の影響が重なったものと診断された。津田さんに末梢血管拡張剤を注射してもらい、後は水やお茶を大量に飲んで排尿に努めた結果一晩で回復した。

7月4日この日は風雪となり、各キャンプ共行動中止となる。C4(6300m)でルートワークにあたっていた田中、若宮君の内田中さんが食欲不振との報が入る。

津田さんより鎮痛剤と肺炎予防の薬を飲むよう指示された。7月5日今日も風雪のため全員停滞する。

田中さんは食欲不振、若宮君は頭痛と左目焦点がぼけて目がかすむと云う。津田さんによると、雪目又は高度障害と疲労が考えられるとの事。7月6日田中、若宮君は体調不良のためC2(5000m)へ下る。

山岸、岡本は彼等と入れ替わりC4に入る。C3は沢村、津田、宮波、中川、中野の5名となる。BCの増江隊長から以下の指示が伝えられた。食料の現在量、隊員の疲労・消耗度、天候の周期等から考えると、これ以上遅れることはアタック出来なくなる恐れがあるので、C3以上の全員でC4へ明日出来るだけ多くの荷上をして、即刻アタックに入るよう指示された。

津田さんからは、明日全員で荷上に頑張って貰いC4へ着いて体調の良い者をアタックメンバーとして選びたいとの事である。7月7日山岸、岡本はC5設営のため荷上する。荷上を終えC4へ戻ると、津田さん

がやや緊張した表情で岩の上に腰掛けていた。

重々しい空気があたりに漂っている。

直感的にアタックのメンバーが決まった事が判断できた。C4をアタックベースとして、アタックは沢村、中川君、サポートは山岸、岡本C5までの荷上を宮波、中野君に決定した。

7月8日宮波、中川君が頭痛を訴える。津田さんに注射を打ってもらい二人共今日の行動は中止となる。

昨日まで好調だった中川君が扁桃腺炎で動けなくなった。急遽アタックメンバーを交代する。沢村、岡本のアタックと山岸、中野君のサポートでアタックする事になりC5(6500m)へ入った。7月9日雪田を登ると岩稜に変わる。岩稜をぬけると第2雪田が現れた、前に岩稜が立ちはだかっている。それを右に回り込みさらに登ると、プラトーに出た。ここで、サポートと分かれて膝までのラッセルに悩まされながら、広い大地を進み頂上に続く雪稜下部の岩壁に着いた。

ここを少し登った所でビバーク(7200m)した。

7月10日浅い眠りから目覚め、ビスケットとチーズを口に押し込み出発する。急斜面の中、所々膝まで潜るラッセルに悩まされる。やがて氷の斜面にアイゼンをきかせて登ると、傾斜が緩くなってきた。

日は西へかなりの角度で傾いている。二つ目のピークを越えると頂上が見えてきた。午後6時56分登頂する事が出来た。急いで写真を撮って下りに着いた。登頂ルートよりさらに西へ下ると7600m付近に手頃な岩屋を発見した。この岩屋は人が立って入れる位の大きな岩屋でビバークサイトとしては快適であった。朝目覚めると、岩に寄りかかっている人間の大きさ位の骨を発見した。頭は着いてなかったが、写真を撮って、背骨の部分を持ち帰った。7月11日膝まで潜る雪の中を下っていると、田中、若宮君が1日目のビバーク地点まで迎えに来てくれた。2日間のビバークでバテバテの私達にとっては非常に有り難かった。C4では、津田さんが私達のアタックを終始見守ってくれた。ルートに迷ったときは的確な指示を、心が折れそうになったときは私達に寄り添って励ましてくれた。お陰で頂上に立つ事が出来た。

BCではみんなと再会して祝って貰った。

特に津田さんは目を細めてにっこり笑った、あの笑顔で迎えてくれた。あの人なつこい笑顔は今でも目に浮かぶ。津田さんの突然の訃報に驚きを禁じ得ない。どうぞ安らかに眠り下さい。

合掌

津田先輩が昨年 9 月 24 日に旅立たれた。

また支部の一つの時代が終わった気がする。

私たちをヒマラヤへ導いてくれた人といっても言い過ぎではないだろう。

体調があまり良くないことは耳にしていたが奥様からの突然の知らせを受け、絶句した。

半世紀を超えるお付き合い、第 6 代支部長を長年務められた。

私と岡本さんは高体連の山岳部門で石川支部の先輩方から山の教を頂いていたので、山岳会に入会したのも自然な流れであった。石川支部に入会した年、昭和 43 年 (1968 年) の春、5 月 9 日から 11 日に深田久弥さん(日本百名山著者)に同行して市村先輩と笈ヶ岳に登山した後、顧問の磯野三郎さんの呼びかけで別所の筍料理を食べに行った。

津田さんは深田さんとは東京ですすでにお付き合いがあり、楽しそうに深田さんと話されていた姿が目につく。

この時が初めての津田さんとの出会いであった。

東京から金沢の野町で歯科医院を生業とされているご実家へ戻られたそうで、これを機会に石川支部に入会された。岡本さんや私と同期みたいなものである。誰に対しても人当たりが良く、その話しやすい雰囲気は生涯変わらず、皆から好かれた。

東京にいたころは、アルムクラブ(芳野満彦氏創設)に在籍して、穂高の岩場や鹿島槍にも足跡を残し、見せていただいた写真からもこよなく穂高を愛していたのがよく分かった。

当時の日本の山岳界はバリエーションルート開拓時代の最中で、社会人山岳会がヨーロッパアルプスのマッターホルン北壁やアイガー北壁、グランドジョラス北壁で冬季初登攀を成し遂げ、輝かしい記録を重ねており津田さんから数々の書籍をお借りして楽しく必死に読み漁ったものだ。

昭和 44 年の年明けはいきなり金沢大学山岳部が劔岳の赤谷山からの遭難救助要請で始まった。当然若手一兵卒の私たちにも招集が掛かり、元旦から 11 日まで劔岳に閉じ込められた。世に言う「劔岳大量遭難」、「トランシーバー遭難」と言われるもので、救助要請も行くか中止か二日間振り回され、1 月 3 日に入山してから 9 日後やっと全員無事下山できた。

15 パーティー、実に 81 人が劔岳で行動不能になり、

18 人が亡くなった。芦峯寺の山岳ガイドの二人が雪庇を踏み抜き、姿を消したが幸い翌朝稜線まで上がってきて、その足で下山してしまった。

へとへとに疲れて馬場島からの帰路、津田さんと増江さん達が迎えに来て下さったのは本当にうれしかったのを覚えている。後から思えば、貴重な体験ばかりだ。

津田さんはヒマラヤ、特にパキスタンの東部ヒンドークシュヒマラヤの知識が豊富ですでにチトラルからギルギット方面をトレックし、深田久弥さんとの会話には聞いたこともない名前の峠や山の話がされていたのもすでに海外を歩いていたからなのかと感銘を受け、急に海外の山が近くに感じた。

この年、石川支部に海外登山研究会が発足し、アラスカのデナリ(当時の呼称はマッキンリー)遠征計画やヒマラヤの研究・計画をしていたのだが、再びパキスタンへ入境した津田さんが撮影してきた、チトラルのモスクやディルゴル氷河から俊立するティリチミール(7708m)の威圧感のある写真に引き付けられた。

そして津田さんの話を聞くうちに、此処登りたい…と皆の気持ちが膨らみ、暮れに開かれた「山祭り」でついに 2 年後の昭和 46 年 5 月から 8 月の期間ティリチミール遠征計画が小林支部長から発表された。

ヒマラヤへの夢が一気に目標に変わった瞬間であった。昭和 45 年には全国でヒマラヤを愛し研究をしている有志が結集し吉沢一郎翁を会長に、第一回ヒンズークシュ・カラコルム会議が始まり、津田さんも遠征準備委員会で忙しい中、田中先輩と若宮さんを同行して研修や情報収集に会津若松まで精力的に動かれた。

しかしながら初めての海外遠征には津田さんの経験、知識が不可欠で、津田さんの遠征参加が必須条件であったが、はじめは「そう何度も仕事休んで長期間海外に出るのは無理だ」と断られ、しまいには増江先輩と私たち隊員数名がご自宅へ押しかけて、「お願いですから何としても同行して下さい」と手をついて懇願し、とうとう奥様も涙を浮かべて頷いて、津田さんも首を縦に振ってくださった。奥様にしてみればまた 3 カ月も家を空けられるのかという思いや歯科医の患者さんのことを思うと、さぞ気苦労されたことと今にして思う。それからの日々は、計画と準備と訓練に明け暮れた。山へ行くために仕事をした。

劔岳で登攀訓練も重ねた。今と違ってメールが有

る訳ではなく度々津田さんのお宅に相談に行った。

奥様が葛藤を内に収めいつも明るく私たちを迎えてくれたのは有難かった。

遠征準備委員会は昭和46年2月までに36回を重ね、その間各担当者は仕事以外の時間は全て計画・検討・準備に明け暮れた。

何をするにも津田さんの存在は大きかった。

そして3月、「石川支部も海外遠征やりなさい」と筍料理を食べながら激を入れて下さった深田久弥さんが、茅ヶ岳を登山中亡くなり、遠征の報告はかなわなかったが、津田さんも私たちも生前の大先輩の御縁に深く感謝した。準備委員会は実行委員会に切り替わり、大図目を迎えた3月になってパキスタンは政変不安で登山許可が下りない可能性大で一旦中止、ストレスの毎日、遠征隊解散もやむなしの中、3月19日になっていきなりパキスタン政府から登山許可が下りたが、これには慌てた。

津田さんはすぐにパキスタン大使館へ登山許可書受取と登山隊打ち合わせに上京し、諸々の問題を解決し

てくれた。参加可能な隊員も変動があり、最終的に残った参加隊員にもいろんなドラマがあったティリチミール遠征だった。思い出は切りがない。

あとは岡本さんの思い出に任そう。

晩年、歯科医の生業を終えられたあと、槍ヶ岳行きたいとのことで飛騨沢から入った。

天候に恵まれ、津田さんは懐かしい滝谷の岩壁を見上げてアルムクラブの仲間たちとの思い出を話してくれた。槍平小屋に泊り翌朝仲間二人を槍に見送って、津田さんと私は上高地の山岳研究所に下山した。

蒲田川右股の流れが美しかった。

山岳研究所のテラスでコーヒーを飲む津田さんの満足そうなお顔が、忘れられない。

毎年の日本山岳会の年次晩餐会には動ける間は必ずと言っても良いほど上京された。

同じ山の時代を過ごさせていただいた幸せを、今も心から感謝している。

(合掌)

津田文夫さんと山と私をつなぐもの

田中 康典

私は石川支部を1度退会している。調べて頂いたら再入会は1997年4月となっているらしい。

津田さんは昨年(2024年)9月24日86歳で天国へ召されました。私とほぼ1回りの年齢差である。

まず自分の話からさせて下さい。2000年9月に26年勤務した会社役員を50歳で退職し、東京の出版社に転職。長年の夢であった山岳ガイド資格の取得を目指すために。そして翌年の2001年5月には(社)日本アルパインガイド協会(AGS-J)の養成学校に入学、翌2002年に[マウンテン・ガイド]資格を取得。2003年には[アルパイン・ガイド]資格も。その後、日本山岳ガイド協会認定の山岳ガイドⅡ(2)資格。山岳ガイド資格取得から20年あまり。そして皆さまのご支援のお蔭で2003年から2009年の7年間かけて幸いにもセブンサミットのすべてに登頂することができました。

さて、本題に入ります。今回、津田さんの蔵書10冊あまりを頂戴しました。その中から、自分の人生に影響を与えた何冊かの本をご紹介させて頂くことで、津田さんとの思い出につながればと思う次第です。

1. 『いのちの山』(古川純一) 1967年

大学山岳部時代には彼の山の店[ジャヌー]に入り浸りで登山靴、ザックなどの装備を購入するだけでなく、よく山の相談にも耳を傾けてくれたことが思い出される。彼は昭和30年代の前半、岩壁初登攀の黄金期に活躍した名クライマーである。(『わが岩壁』に詳しい)また小森康行(のちに写真家となる)たちとJCC(日本クライマースクラブ)の創立者でもある。またJCCの大西(旧姓 沢上)登氏との邂逅。

1992年5月のゴールデンウィーク明けの週末を利用して、わたしは劔岳本峰からパラグライダーでのフライトを目指して劔山荘へ1人で向かっていたが、風雪となってどうしようかと迷いながら下っていた。そこへ大西さんが顧客を連れて私の方へ登ってきた。彼らは悪天のため下山するという。

ここで私は日和ってしまい、一緒に下山することを決断。だが劔御前小屋まで戻ると天候回復の兆しあり。それではとここで彼らと別れて立山山頂からのフライトに変更することにした。幸いにも風も穏やかになり、条件が整った。山頂でキャノピー(パラグラ

イダーの機体)を広げて風を読みながら、思い切って立ち上げ山頂を蹴る。すると上手い具合にキャノピーに風が入り滑空始める。天候のことも気になり雷鳥平にランディング体制を取る。無事に着陸できて一安心。これには後日談がある。その5カ月後にそのフライト写真が大きく引き伸ばされて送られてきた。今もその写真を大切に保管している。

2. 『白い城砦』(芳野満彦) 1970 年

私たちのアルパインガイド資格の2004年の授与式でお会いしてツー・ショットを撮らせて頂いたことをよく覚えています。日本人で初めてマッターホルン北壁を登り、続けてアイガー、グランドジョラスの北壁を登り日本人として初めてヨーロッパアルプスの三大北壁を完登。グランドジョラスではパートナーを失い、ハッセルでも友人を亡くす。そうした劇的な登山は彼をモデルにした新田次郎の『栄光の岩壁』に詳しい。私の中では上高地・徳沢園の冬季小屋番としての印象が強い(彼の著書『山靴の音』に詳しい)

3. 『山の足音』(畦地梅太郎) 1961 年 アルプ選書シリーズの1冊

大学山岳部時代に横浜のデパートで彼の版画展があり即売会もやっていた。[山男]シリーズの一枚だったが学生の身分では買うのは難しかった。でもどうしても諦めきれず、翌日お金を握りしめてそのデパートに出かけてみると、その一枚は売り切れていたことが思い出される。その決断力の無さが悔やまれる。

それから50年あまり、昨年の2024年に彼の出身地、四国・宇和島市にある畦地梅太郎記念美術館を訪れることができたことは幸いであった。

それに関連して、昭和33年(1958年)に山の文芸誌『アルプ』が創文社から創刊された。串田孫一が代表、編集長は大洞正典。尾崎喜八、畦地梅太郎、深田久弥、内田耕作、山口耀久、三宅修、大谷一良等が中心となって25年間にわたり多くの読者を得た。1983年惜しまれつつ、300号で終刊となった。その間約600名の執筆者が支えた。

彼らのことについては、北海道斜里町の[北のアルプ美術館]へ訪れてみて頂きたいと切に願うものです。

私も1回だけですが、斜里岳登山後の翌日に出かけております。また訪れたい。

余談ながら、時は流れて学術出版社であったその創文社も2020年6月に出版事業を休止した。

なお、私の手元にある『アルプ』は全300号のうち88号1冊のみ欠本となっている。

何とか全巻揃えたいものです。

4. 『私の山岳写真』(田淵行男) 1964 年

日本を代表する昆虫生態研究家であり、自然写真家である。この本は彼の50年に及ぶ写真家としての考え方、取り組み方が書かれていて興味深い。

安曇野には田淵行男記念館がある。

ぜひ、訪れて頂きたいものです。

5. 『白山連峰文献集』1992 年 非売品

力丸茂穂さんが編集者となり限定220部制作、最終ページに津田さんへ謹呈との力丸さんの署名がある。

最後にチョモランマ遠征時にダイアモックス(高山病対処薬)を処方して頂いたことは忘れません。

一般の人が入手するにはハードルが高かったので大変有難かったことを覚えています。

津田さん、お世話になりました。

合掌！！

今回取り上げさせて頂いた5点のうち4点は1960～1970年代のもので、今の若い人たちには馴染みがないかもしれません。でも、この時代を代表する方々であります。

図書館で手に取って頂けたら幸いです。

恐らく、加賀市の深田久弥山の文化館にはすべて揃っているはずです。

当時の先駆者たちの声に耳を傾けてもらえれば、津田さんのご遺志に沿うものではないかと考える次第です。

I. 計画山行・個人山行 報告

1. 金峰山(2,599m)と瑞牆山カンマンボロン(弘法大師が梵字で刻み込んだ大日如来・不動明王の意味)

日時 : 2024 年 10 月 11 日(金)、12 日(土) 晴れ

メンバー : 堀、藤井あ

1 日目、23 時金沢出発するも、福光まで来て、スマホを忘れたのに気が付き、戻ってもらい迷惑をかけてしまいました、すみませんでした。

上高地経由で山梨に向かいます。金峰山の登山口は、長い長い 30 キロの林道を登って行きます。

7 時前に到着、すでに舗装された所は満車、平日ですが次々車がやってきました。

金峰山へは距離こそないですがアップダウンの連続で、睡眠不足には堪えました。朝日岳までの登りで左手には南アルプスの山々と富士山。朝日岳から最低鞍部まで下り、更に登り返し鉄山(くろがねやま)へ。シャクナゲの群生地みたいです。日本庭園のような登山道を登り稜線に出ると、昨年登った瑞牆山が見下ろせました。大きめの岩がある登山道を行けば金峰山に到着。

目の前には五丈岩、圧巻です、人が小さい。



少し戻った所で休憩。睡眠不足で頭痛。なんとか下山し大弛小屋にて山バッジを購入。ここのテン場もフラットで良さそう。国師ヶ岳にいく体力はなかったのでこれもリベンジ案件になりました。

昨年お世話になった、みずがき山自然公園へ大移動。

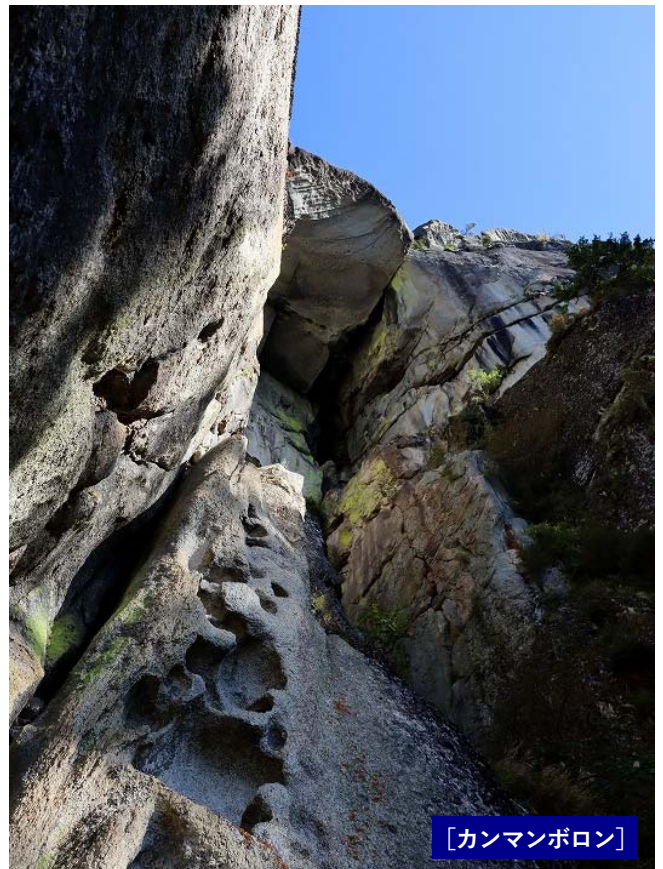
テント設営し宴会後、爆睡しました。

2 日目、昨年のリベンジ案件のカンマンボロン。

登山口の駐車場はほぼ満車。今回は快晴。

周囲もよく見えました。カンマンボロンの入口も確認できカンマンボロンへ。急登を登り、岩と岩の間をすり抜け到着。梵字に見えます。

写真で見るよりスケールが大きかった。



今回は瑞牆山には行かないので下山。

キャンプ場、瑞牆山の駐車場は車が溢れ、帰路、どこもかしこも車も人も溢れていました。

睡眠不足で登山は厳禁と改めて思った山行でした。

そして長い距離の運転ありがとうございました。

[文：藤井あ 写真：堀]

2. 日野山(794m) 泰澄ゆかりの信仰の山

日時 : 2024 年 11 月 4 日(月・祝日) 晴れ

メンバー : 堀、八十嶋

堀先輩に誘われ久しぶりに登った山。正直な所、こここのところ仕事が忙しくトレーニングもさぼっていた・・・リハビリ的な意味でもテンポよく足を運びたいという気持ちで山行に臨んだ。

ところで日野山は、私にとっては地元(福井県三国町)に近い上、大学のころ研究テーマにしていた白山信仰ともゆかりがあるため、身近に感じている山だった。登る機会に恵まれてよかったと思う。

せっくなのでまた白山信仰の話をしてしまうが、伝承によれば奈良時代の717年に泰澄が白山を開いたとされる(『泰澄和尚伝』、『白山之記』などの文献に書かれている)。そして日野山はその翌年に泰澄によって開かれたという。泰澄といえば、福井～石川の山で霊山といえばほぼ「泰澄が開山した」と伝承されちゃうくらいのビッグネームだ。なんなら温泉を発掘したり、能登一円を旅してあちこちで伝承を残したりしている。神通力で米俵とか空を飛ばしちゃう。

それぐらいすごいのだ。それがすべて実話かどうかはともかく、泰澄ゆかりの伝承をバックボーンとしてご当地の人は山々を大切に扱い、信仰の場として心のよりどころにしてきたのは間違いない。それこそが尊いことだ。私たちが現代で楽しく山登りしているのも、山を信仰の場として大事にしてきた先人たちのお陰だと思う。何が言いたいのかというと、日野山はこうした山岳信仰の色がかなり濃く感じられる山である。まず特筆すべきは麓から見た格好良さだ。



地元のシンボルとしても大切にされることは、信仰の場として重要な要素である。新幹線が開通した麓の町から本当にきれいに見えた。つまり現代でも大事にされるべき地元のランドマークで有り続けている山といえる。今回は登山口も神社、山頂も神社というコースを登る。



[登山者駐車場

神社境内に駐車しないよう]

白山もそうだが、山全体が聖域という意味合いを帯びていると思いながら登ると、日ごろ塵芥に塗れた世俗の身でも気持ちは引き締まる・・・かもしれない。

この日は天気がよかったことも有り、登山口のお社と苔の風景がまず格好よかった。初っ端から一番いい写真が撮れたかもしれない。カメラマン的には早くもご利益ゲットである。そして登山道が程よく陰しく、程よく歩きやすい。無言で登っていても苦痛じゃない。修行とか、トレーニングにうってつけな山だ。明らかに昔からたくさんの人が登っていると感じられる。100mごとに現れる、地元の小学生が作成した「山頂まで〇、〇キロ」の看板も味わい深い。

正直結構アバウトな距離感覚と、きわめて味わい深いイラストが心を癒してくれる。



本当に地元で愛されている山なんだと感じた。たくさん道がつけられているゆえに迷いやすい面もあったが、おおむね初心者向けの山だ。山頂にもお社があり、ゴールしたという感覚がしっかり味わえる。祭礼などについて調べてみても面白いかも知れない。

「興味」と「敬意」は似通った気持ちだと思う。そういう意味では、気持ちをこめて登りやすい良い山に登山することが出来た。山にも堀先輩にも感謝したい(いつも車出しありがとうございます)。

[文: 八十嶋 写真: 堀・八十嶋]

3. 五支部による合同登山懇親会 福井支部主管

日時 : 2024 年 11 月 16 日(土)、17 日(日)

メンバー : 樽矢、大幡、埴崎

今年は福井支部主管にて開催。石川支部より 3 名参加、登山前日 16 日にルポの森に集合し、朝倉遺跡と北の庄、家康次男の結城秀康の生涯の講演を聴講のちに食事会。各支部からの差し入れ銘酒に色々な話が出て、誠に楽しい食事会となる。



翌 17 日は朝倉遺跡から朝倉家の山城、一乗城山に登る。杉林の中を汗をかきながら上がると三国港まで見える高台に出る。

4. 年次晩餐会

日時 : 2024 年 12 月 7 日(土)

メンバー : 樽矢支部長、大幡、徳田、堀岡、樽矢聡

晩餐会の前の講演会に天皇陛下ご臨席賜りました。陛下は残念ながら講演会のみで、講演終了後にはご退席されました。



晩餐会は石川支部より 5 人参加、会長挨拶、在籍 50 年の永年会員紹介、新入会員の紹介、息子もめでたく壇上にあげて頂きました。その後は各テーブルでの歓談、旧知の山友達との生存報告等、年に一度の楽しみでした。

更に 10 分ほどで山城の堀切を越えて頂上へ、この辺りから少し雨が来て、各自傘やカッパを着用、記念撮影をして早々に下山。元が雨で滑りやすくなってる紅葉を愛でながら神社まで、後は遺跡の横を見ながら集合場所に帰着、総勢 39 名、解散となる。

来年は琵琶湖沖島の予定と聞く。宿の手配やコースの案内、福井支部の皆さんに感謝して帰路に着く。



[文・写真：樽矢支部長]

皆さん本当にお元気です、90 歳を越しても山に行かれている先輩達のお姿を見るにつけ、まだまだ山に行かないと、と改めて思う晩餐会でした。



[文・写真：樽矢支部長]

5. 蛇谷ヶ峰(901.7m) 2025 年 巳年 干支の山

日時 : 2025 年 1 月 18 日(土) 晴れ

メンバー : 堀、八十嶋、藤井あ、長井

朝 5 時、道の駅めぐみ白山で集合出発。

晴天の中、4 名で蛇谷ヶ峰へ行ってきました。

今年の干支は巳(へび)です。

実は私は年女です、テンションが上がります。

8:30、くつき温泉の駐車場に着きましたがテカテカツルツルでスケートリンクって感じで、即チェーンスパイクを装着しました。 駐車場への道路も凍っていて車もちょっぴりすべっていたかな。

私の車と私の運転技術だと無理だわ。

09:00 準備を整えいざ出発。 登り始めは土でドロドロ、チェーンスパイク履いていて良かったと思ったのは私だけかしら、徐々に雪道になってきて青い空と白い雲のコンスタントが素晴らしいすぎです。

楽しくおしゃべりしながら歩いていると視界が開けてきて、10:40 頂上へ、登ったね。



あの山は何? 白山? 白山はもっとあっちかな? などと話しているとへび見えるよとの声が。

どこどこと目線を追うと、そこにはへびが。



[へびの様に見える地形]

これが蛇谷ヶ峰のへびなのね、お会いできてとてもうれしいです。 お天気によっては見えない日もあるらしいけれど今日はハッキリクッキリ見えました。

感謝感激です。

とても人気の山ですね、頂上はたくさん的人了、ワンちゃんも。 山頂は 360 度のパノラマ、素晴らしい、山って良いね。

[背後には伊吹山]



山頂で早めのごはんを食べて、写真を撮りまくって、名残惜しいけど、11:34 下山開始です。

下山途中もたくさんの方が登ってきていました。

12:50 に下山後はくつき温泉のお風呂に入って、夕方に無事に道の駅めぐみ白山に帰ってきました。

今日も感動をありがとう、運転してくれた堀さんありがとう、一緒に登った皆様ありがとうございました。

帰宅後は良い気分美味しいビールを飲んで爆睡したのは言うまでもありません。

[文: 長井 写真: 堀・八十嶋]

6. 位山(1528.9m) 飛騨一宮水無神社の御神体 パワースポットの山

日時 : 2025 年 3 月 23 日(日) 晴れ

メンバー : 堀

以前から気になっていた位山に登ることが出来た。

2 月中に行きたかったが居座り寒波の影響で石川県も降雪が続く除雪の毎日で、とても山に行く余裕は無かった。3 月に入り雪も一段落、そろそろと思ったら今度は仕事の呼び出しが続いた。仕事も落ち着き、22 日(土)に行こうと準備していると今度は家族からストップが、なんと法事を忘れていました、朝からお寺さんが来てお参りでした、との何やかんやでようやく 23 日(日)になりました。ここまで遅くなると雪が残っているのか心配になったが登山口のモンデウススノーパークに着いてみるとスキー場の今期営業は終わっているがゲレンデには十分な雪が残っていた。積雪期の限定として夏道では無くゲレンデを直登出来る、キツイけれどこれを登りたかった。



〔駐車場より、ゲレンデトップが夏の登山口〕



ゲレンデを直登 天気が良く暑い

なぜ位山が気になっていたかですが、位山は山体自体が飛騨一宮水無神社の御神体であり飛騨北部と南部の境界で宮川と飛騨川の分水界である位山分水嶺の山であること、そしてパワースポットとして知られている。と言うのも山頂付近はゼロ磁場との説があり、天孫降臨

や天の岩戸などの伝説も残されている。

登山道にはいくつもの「〇〇岩」と名付けられた奇岩巨石が点在しているが、この岩の写真にオーブが写るとも、さらに GPS が狂うとも、確かに自分が持っていたスマホ、デジカメ、GARMIN の GPS 位置情報が全てズレていた、機器の性能差とも思えるが、ズレが大きかった。

その様な山なので UFO や宇宙人の目撃も、位山の近くには「五箇山の天柱石」や「尖山」にも同様の伝説があり、呉羽の皇祖皇太神宮には位山より神(天照大神)が川を下って富山の呉羽に入ったと言われがあります。

この神が通った川こそ神通川と呼ばれ、現在の神通川は富山市から 41 号線が沿っているが神通川自体は猪谷から神岡方面には高原川と、「宮川」として高山市を流れて位山と川上岳が分水嶺となり水を集めている。

「宮川」側にも位山と川上岳の登山口があり水無神社奥宮の鳥居からが位山への古代からの登拝道の様です。

但し、2024 年 6 月に道路が崩落し通行は困難とのこと。

自分は見ていないが映画「君の名は」でも登場するのでアニメの聖地ともなっている様で人気の山だそうです。



その様な位山なので内心は少々怖さを感じながら登りましたが UFO や宇宙人に会わず、頂上で軽く早めの昼食を食べ、下山は暑くて汗だくで登ったゲレンデの直登を直滑降で走って下りました。

スキー、スノーボードやヒップソリでゲレンデを下る人も居ましたが走っても 10 分程だったので滑ると数分は楽しめるのかな、でもその数分のために余計な荷物は持たないかな。

[文・写真：堀]

Ⅱ. 行事等 報告、その他 案内・連絡

1. 会務報告

- ・三水会 2024 年 9 月 19 日(水) 19 時～21 時 金沢市総合体育館第 3 会議室
参加 樽矢支部長 大幡副支部長 堀事務局長 埴崎 池本 出水 長井 藤井 8 名
議題 当日同時刻にて支部連絡会 web ミーティングがあったが三水会の為石川支部は不参加
プロジェクターにより山行報告があった
- ・三水会 2024 年 10 月 16 日(水) 19 時～21 時 金沢市総合体育館第 3 会議室
参加 樽矢支部長 大幡副支部長 堀事務局長 埴崎 藤井 5 名
議題 11 月に実施の 5 支部合同懇親山行について詳細打ち合わせ
- ・三水会 2024 年 11 月 20 日(水) 19 時～21 時 金沢市総合体育館第 3 会議室
参加 樽矢支部長 大幡副支部長 堀事務局長 埴崎 出水 藤井 6 名
議題 晩餐会出席の確認と山行報告
- ・三水会 2024 年 12 月 18 日(水) 19 時～21 時 金沢市総合体育館第 3 会議室
参加 樽矢支部長 大幡副支部長 堀事務局長 埴崎 藤井 5 名
議題 晩餐会の報告他
- ・三水会 2025 年 1 月 15 日(水) 19 時～21 時 金沢市総合体育館第 3 会議室
参加 樽矢支部長 大幡副支部長 堀事務局長 埴崎 池本 藤井あ 出水 長井 8 名
議題 プロジェクターにて個人山行記録上演、10 月山行の相談
- ・三水会 2025 年 2 月 19 日(水) 19 時～21 時 金沢市総合体育館第 3 会議室
参加 樽矢支部長 大幡副支部長 堀事務局長 八十嶋 出水 5 名
議題 個人山行報告と次の山行の相談、3 月の三水会が会場予約の都合上第 1 会議室になる旨連絡
- ・三水会 2025 年 3 月 19 日(水) 19 時～21 時 金沢市総合体育館第 1 会議室(会場予約の都合上変更)
参加 樽矢支部長 大幡副支部長 堀事務局長 田井 埴崎 長井 6 名
議題 4 月総会に向けての役員会とした

Ⅲ. 今後の予定

1. 行事予定

4 月 5 日(土)	14:00 より令和 7 年度の総会を予定
4 月 20 日(日)	深田祭 日本山岳会山梨支部主催
4 月 26 日(日)	国東半島集中山行 日本山岳会
4 月 27 日(土)	久弥祭・富士写ヶ岳登山【月例山行】
6 月 7 日(土)、8 日(日)	ウェストン祭
6 月 8 日(日)	富士写ヶ岳 登山道整備 ※日程は未定
9 月 28 日(日)	支部合同会議(支部長・事務局長)
11 月 日は未定	5 支部合同懇親山行 琵琶湖 沖島 京都・滋賀支部
12 月 6 日(土)	年次晩餐会

が予定されています。

山岳祭の詳細については「山」に同封されていましたパンフレットをご覧ください。

石川支部に係わる久弥祭だけでなく他の山岳祭にも出かけませんか。

〔 三水会 予定 〕

4 月は総会の為、三水会はありません

2025 年 5 月 21 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2025 年 6 月 18 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2025 年 7 月 16 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2025 年 8 月 20 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2025 年 9 月 17 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2025 年 10 月 15 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2025 年 11 月 19 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2025 年 12 月 17 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2026 年 1 月 21 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2026 年 2 月 18 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室
2026 年 3 月 18 日(水) 19 時～21 時	金沢市総合体育館	第三会議室

場所については会場の予約の都合上、変更になる可能性があります、
変更の場合は事前に連絡します。

編集後記

今冬も異常気象により日本海側では各地で大雪となりました。
東北では記録となる積雪量を記録、日頃は積雪量の少ない
山陰地方まで雪化粧となりました。
幸いにも石川県はさほど積もりませんでした、それでも
例年より多く 2 月は除雪の毎日を過ごし山に行く余裕は
ありませんでした。
最近では積雪が予想されるときは道路を通行止めにする
予防的処置が行われるようになり、一時的ですが、
石川県は陸の孤島状態になっていました。
この 2 月の積雪で山の状況も厳しくなり多くの山域で
事故が多発し亡くなられた方もおられます。
これからの時期は融雪による雪崩、特に全層雪崩の
可能性が多くなるので十分に注意をお願いします。

日本山岳会 石川支部報

発行日 2025 年(令和 7 年度)3 月 31 日

発行者 公益社団法人 日本山岳会 石川支部

支部長 樽矢 導章

TEL/FAX : 076-237-5769

編集者 支部報担当 堀 正春

(事務局) TEL/FAX : 076-248-0175

E-mail isk@jac.or.jp

HP <https://jac-isk.com/index.html>

HP は更新を予定しています。

アドレスは変更になります。